

その時の患者さん達



「藤原伸一さん撮影」

阪神大震災に想うこと

伊達静男

“ゴォーツ！！”“ゴォーツ！！”とい得体の知れぬ轟音（地鳴りか？）と共にベッドから振り落さんばかりの“ドン！！々、々”という地面からの突き上げ、そして“ガタツ！！、々、々”というものすごい横揺れに思わずベッドの横杵をしっかりと把み、一瞬は何が起こったのかわからなかった。が直ぐにこれはとてつもない大きな地震だと気がついた。後で知る所によるとこの物凄い揺れは1分たらずとのことであるが、初めて経験する恐怖のせいには私には5分にも10分にも感じられた。

どれが本震で、どれが余震かはわからぬが、未だベッド脇の台上の物がガタガタと鳴り止まぬうちに宿直の看護婦さんが「伊達さん！怪我はありませんか！？」と病室に飛び込んできてくれた。ベッドの上に身を起こし「うん！大丈夫！！ありがとう」と答えた直後、再び大きな揺れがあり、看護婦さんは立っていることが出来ず、部屋の仕切りカーテンにつかまり、側壁に片手をついて身体を支えながら再び隣の病室へと飛んでいった。

誰もが自分の身の安全を第一に考える未だ激震の収まらぬ内に、入院患者の身の安全を第一に考えて行動する看護婦さんの勇気と使命感に強く心を打たれた。

暫くして非常灯がついているディルूमに集まって下さいという案内があり、定位置から45度も斜めにズレているベッドから、収納棚から落ちた衣類や鞆等が散乱する床へ下りて松葉杖を頼りに患者の多くの人が集まっている部屋へと急いだ。

皆んなが異口同音に地震の物凄さと恐ろしさを、そして家族と家屋の安否を案じている時、数人の宿直の看護婦さんは黙々として歩けない患者のベッドを廊下の片側に縦に1列に並べる作業と避難に備えて患者数の点検を繰り返していた。

午前8時過ぎ、やゝ落ち着いた状況のなかでいつもの通りパンと牛乳の朝食が配られた。この朝食は昨日の内に準備されたのであろうか、このあとの食事はどうなるのであろうかと案じながら、祈るような気持ちで食していると気賀事務長が部屋へ入ってこられた。

地震の直後未だ夜も明け切らぬ内にバイクで家を出て病院へ駆けつけられたとのこと。来る途中の被害の大きさと病院の今日の昼・夕食を、そして明日以降の食事をどのように手配するかを心配して居られた。病院と患者の安全をそして食事を始め医療の継続を図るために身の危険を顧みずに自然と身体が病院へ向かわれたのであろう。その責任感の強さに自然と頭の下がる思いであった。

正午前に看護婦さんから「家は潰れたけれど家族（妻と次女）は無事に避難できたそうですよ」と家族からの電話があったことを伝えられてホッと安堵の胸を撫でおろした。

その日の午後からは病院はまさに戦場と化した。次々と運び込まれる重傷者、夜勤明けの看護婦さんも帰宅されずに甲斐がいしく夜遅くまで連続して治療に従事している。

先生方も食事をする暇もなく、臨時に設けられた処置室で治療に当たられている。本館口ビーまでが救急患者であふれ出した。

17日の午後3時頃には、給水タンクの水が底をついて病院内も断水となったが、昼・夜とも事務局の活躍でパンが確保され、1人に1つずつ配られた。

18日の朝食からは鐘紡本部救援隊の必死の輸送による“おむすび”と水が配られて病院では結局1食も欠食することなく食糧が確保された。

被災地では信じられぬことであった。

間髪を入れぬ関係者のご努力に患者も近隣の避難者も心から感謝した。

17日の夜になると一瞬にして最愛の肉親を亡くされた方、又重傷の身内を病院へ運び込み心痛される方々が近隣の避難者と共に病院へ続々と集まってこられた。

何方のお話を伺っても余りのご不幸に慰める言葉もなく一緒に泣くのみである。ご家族を失い、或いは重傷と

なられた方々の悲嘆に較べれば家屋の全壊などはものの数ではなく、たゞ家族が無事に避難していることが何よりも有難く身の幸せを痛感した。

昨年末に自分の不注意から転倒して右足首を骨折し、歩くことも出来ず、入院中の身としては困って居られる老人やご不幸な人の力になれぬ我が身のもどかしさに切齒扼腕するのみである。

震災後約1週間入院が続いたがこの間先生、看護婦さんを始め多くの患者とそこご家族並びに病院へ避難してこられた方々からも言い尽くせぬ親身のご親切とお世話をいただいた。

多くの人々が食糧も水もなく、そして着る物も寝る所とてない極限の状況下にあつて、乏しきを分かち合い、少しの席も譲り合つてお互いに他を思いやり励まし合う姿、そこに人間の尊厳と優しさの本性を目の当りに出来たことは今回の不慮の震災に遭遇して最も得難い教訓であつた。

鐘紡記念病院では、至る所に「使命感、親切心、礼節」が掲示されているが人の真価が最も端的に顕われるこの超非常時下に先生、看護婦さんを始め事務所の方々と守衛さんに至るまで全ての関係者が不眠不休で「心の約束」を体現しておられる崇高な姿に深い感銘と感動を覚えた。

最後になりましたが、言い知れぬ勇気と希望と親切を与えて戴いた病院関係の方、一緒に入院していた患者の方々そして病院で知り合った名前もわからぬ多くの方々並びに病院の安全と運営を支えていただいた救援隊の多数の方々に改めて深甚の感謝と心からの御礼を申し上げる。

阪神大震災に遭遇して

山中 健

昨年12月暮れ、尊敬する大先輩であり親友である院長上羽先生から新年早々に家内の手術の必要があることを告げられました。多忙な年末と新しい年を迎えての爽やかな日々も、私にとっては気の重いことであり、1月4日に再度、手術のための入院を促され、5日に入院、12日に無事手術が終わり、ホッと一安心しました。

これからが本当の正月と思った矢先の17日の大地震です。魚崎の自宅が崩れ落ちる中を脱出し、恐怖も正直なところ余り感じず、いの一番に車で無我夢中で病院に駆けつけました。外から見たところ被災の様子のない病院に胸をなで下ろしつつ家内の病室に入りますと、あの直下型地震の表現の仕様の振動を、家内は「ゆっくりと天井が落ちてきた」と言って笑っておりました。

大した恐怖心もなく落ち着いている様子を確認し、岡本の息子夫婦の所にとって返しました。屋内は無惨なまでに破壊しておりましたが、怪我もなく、マンションの倒壊の心配もないとのことで、次に新神戸駅前の会社へと向かった訳です。

地震直後の行動を振り返り、昭和一桁の人間には、家族の安全が一番、第二が職場の状況把握であり、不思議と崩れた我が家のことは念頭にありませんでした。将来を見つめた時、修復可能なものと、全く不可能な物と画然と区別したせいかも知れません。家族と会社従業員さえ健全であれば、家などいくらでも再建できるという気持ちが無意識にそうさせたと感じております。

地震の後、赤ん坊の孫が突然発熱し、鐘紡記念病院で診療していただいたこともあり、又術後の回復過程の家内のこともあり、度々病院を訪問しました。被災の日以来、院長を始め職員の方々が自分の家庭を顧みず、各々の専任の場所で懸命に活動しておられるのを拝見しました。又、上羽先生の奥様も兵庫県警のお医者様であり、地震と同時に昼夜、警察官、市民の医療にあたっておられ、大震災では最も頼りになる医療機関で活躍しておられる姿に頭が下がりました。皆様が交通機関の全く途絶した中を徒歩や自転車で駆けつけられたことは、経営者の一人として私は本当に敬服致しました。親友である上羽院長が明石から22kmを歩いてこられたのは、年齢から考えて驚きであり、私同様、昭和一桁の気骨かも知れません。また同様に、楠副院長、気賀事務長、徳山看護部長、茂見病棟婦長らの幹部の方々も自宅を顧みることもなく、泊まり込んで頑張っておられる由、機関の中核の在り方を示すものとして、病院の幹部、若い人々も一致協力しておられることは素晴らしいことであり、大いに感謝、感激しております。蛇足ですが私の会社も、私自身会社の一隅で寝起きしており、従業員一同の復興めざしての頑張りを有難く思っており活動しております。

時折口にする言葉ですが、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」の天と地は大地震で滅茶苦茶になった訳ですが、人の和によって必ず復建される日の来ることを楽しみにしております。それが、5年、10年先であっても嘗てのロマンのあるファッショナブルな神戸を取り戻したいと念じております。

最後に当って、鐘紡記念病院のスタッフの方々、とりわけ上羽院長、楠副院長、坂上先生、看護婦の方々本当に有り難うございます。

阪神大震災当日の日記より

藤原伸一

1月17日午前5時、私が監督をしているバスケットチームの前日のゲームの反省で、なかなか寝付くことが出来なかった。病院はいつものように深い眠りに入っていた。その深い眠りを一気に叩き起こすあの悪夢の災害が襲った。

突然地面の方からズズーンという地響きが起こり、グラグラッと小さく揺れ始めた。私はウトウトしていたが、すぐに目が覚め、布団の中にもぐり込んだ。ズズーン、ズズーンと地響きがして、一度沈み込んでから突き上げるような激しい縦揺れが4、5回、最初の縦揺れでベッド左横にあるテレビが枕元に落ちてきた。縦揺れが終わると続けざまに、長い大きい横揺れに変わった。横揺れでキャスター付きのベッドがズルズルと動き、右横にある整理棚から物が飛び出して来た。整理棚は壁から4～50cm程ずり動いていった。かなりの時間激しく揺れていたように感じた。しかし実際には20秒程なのだが、私には10分にも20分にも思えた。

地震が小康状態になったので、起きて周囲を確かめることにした。枕元のベッドランプを点けようとしたが停電のため点かず、部屋の中は暗闇に包まれていた。私は非常用の懐中電灯が、部屋の入口に備え付けてあるのを思い出したので、それを持って廊下に出た。廊下には他の病室の患者も飛び出してきていた。さいわいなことに病院内はすぐに自家発電装置が作動した。廊下と非常口、看護婦詰所、休憩所兼避難所（ディルーム）の非常灯が点灯した。1階整形病棟の患者は看護婦2人の指示により、動ける患者はディルームに集合、ベッドから動けない患者はベットごと廊下に出し、点呼を取った。全員無事の確認が取れた。ラジオで震源地は淡路島の北淡町と放送していたが、被害の規模や被害状況はまだ詳しく分からなかった。看護婦2人のうち1人が、これから増えると予測される外来患者のため、救急処置室に応援に行った。この頃から救急処置室前は騒がしくなっていた。すぐに応援に行った看護婦が走って戻って来た。私ともう1人の看護婦に「向こうはすごい数のケガ人が来ている」と言って、あわてて救急処置用の散乱した医薬品を、片っ端からかき集めて持って行った。

救急外来には続々とケガ人が運び込まれて来ていた。最初は頭や額が割れて血を流してはいるが、自分で歩いて病院まで来る人が多かった。しかし時間とともに自力では歩けない人が増えてきた。車で運び込まれる人、畳に乗せられた来る人、家族に背負われて来る人、そしてすでに息を引き取っている人。1時間もしないうちに処置室前はケガ人で溢れかえっていた。その日当直の医者、看護婦が必死になって応急処置をしていた。しかしどんどん増えていくケガ人すべてには、なかなか手がまわらないようだった。その処置室の中で、医者が心臓マッサージを必死になってしている様子が目に飛び込んできた。

50歳位の男性が私に処置室はどこですかと尋ねてきた。事情を聞くと、病院に運び込まれた祖母を探しているのだと言う。私は「おそらくあちらで治療を受けていると思いますよ」と教えたが、男性は「多分ダメやろうな。土に埋まって掘り出したら、もうばあちゃん白くなってたからな。ありがとう探してみるよ。」と言って処置室へ歩いて行った。

午前6時半ごろ、私は家族と彼女の家の安否が気掛かりだったので、新館1階待合室にある公衆電話へ向かった。待合室は上の階で水道管が破裂しているらしく、エスカレーターをつたって大量の水が流れ落ち続けていた。東灘区の自宅に電話を掛けてみたが、コールが鳴るだけで誰も出てこない。何回掛けてもコールばかりが受話器から聞こえるだけだった。そのうちついに不通音となってしまった。一方ポートアイランドに住む彼女の家には、幸運にも電話がつながり、家族は全員無事で食器が全部割れたぐらいとのこと。とりあえず無事がわかりホッとした。

午前7時過ぎ、ようやく長い長い夜が明けて来た。明るくなるまでの、数時間が本当に長かった。この頃、寮から看護婦さんが到着。すぐに救急処置室へ応援に向かった。ケガ人はすでに新館待合室のソファまで溢れかえっていた。待合室が簡易処置室に変わり、手際よく応急処置がされていった。しかし残念ながら目撃しただけでも10人近くの方は、毛布に包まれてストレッチャーで安置室に運ばれて行った。その後ろから亡くなられた方の家族が肩を落とし泣きながらついて行く姿は、1カ月以上たった今でも脳裏から焼き付いて離れない。

午前8時半頃、私は病室の片付けを始めると、電気が通電し病室の蛍光灯が点灯した。すぐに情報が欲しいのでテレビをつけてみた。ヘリコプターからの生中継を各局が放送していた。阪神高速深江で高架が横倒しになっているのが映し出されて、リポーターが東灘区はかなりひどい状況だと伝えていた。

私は不安になり、また電話を掛けに行った。しかし回線がパンクしているらしく、何回掛けても不通だった。それでもその後自宅には30分おきぐらいに電話を掛けてみるのだが、何回掛けてもつながらず、不安と焦りが募っていった。何とか無事でいて欲しいと願うだけだった。

午前10時、私は8mmビデオカメラを持っていることに気が付き、あわてて病院内の様子、周辺の火事の様子を映すことにした。緊急処置室の前でケガ人の生々しいシーンにカメラを廻そうとしたが、そのあまりにも悲惨な光景を、私は撮ることが出来なかった。

この人達にカメラを向けるのは失礼ではないか、私はプロではないのだからそこまで心を鬼にして撮る事はないのではないか、これが自分の家族に向けられていたらと思うと、とてもカメラが向けられなかった。涙が溢れて止まらなかった。しかしせつかく偶然にも8mmビデオカメラを持っているのだから、この悲惨な地震をしっかりと記録しておかなければいけないと考えた。人道に反しない程度で出来るだけの事をしようと思い、遠目で処置の様子だけでも撮ることにした。

まずは自分の病室の様子、看護婦詰所、1階待合室を撮影した。そして屋上に上がってそこから長田区、兵庫区、中央区の様子を撮影した。かなりの数の煙りが上がっていて、特に長田区がひどかった。空は地震の影響による発光現象が起きていて、南の空がオレンジ色と鉛色に薄気味悪く染まっていた。海は重い鉛色をしていて、いつもの海の色とは思えなかった。

ようやく午後4時頃自宅に電話がつながり、妹が出たときには言葉が詰まってしゃべることが出来なかった。すぐに母に代わってもらい状況を聞いた。家族は無事でケガも無いが、家は西に大きく傾き、柱が一部折れて、居住は不可能。次の大きな余震が来たら、倒壊するかもしれないので、当分は家の前で車生活をする事になるだろうとのこと。母から家族全員ケガもなく無事ということを知ったとき、涙が込み上げてきて止まらなかった。普段あまり気にもしていなかった家族の絆を、これほど今まで強く認識したことはなかった。

震災から1カ月半がたった。時間が経つにつれて様々なことが分かって来た。震度7の烈震が来たら、どんなに強い建物でも倒壊してしまう。震度7に耐える建物を造ることばかり考えるのではなく、最小限に被害を食い止めるにはどうすれば良いかを、考える必要があるのではないだろうか。5466人の死を無駄にしないためにも、神戸の被災状況を正確に分析し、同じ過ちを繰り返さないように、しっかりと即断即決が出来るシステムを確立することを強く望みます。そしてまだ神戸では様々な多岐に渡る問題が浮かび上がるだろうが、問題が起こってから対処するのではなく、常に先を読んで問題が起こる前に対処することを望む。

付記 震災直後の給食の記録

1月17日（火）

朝食 朝食と昼食兼用で午前中に配る。

昼食

夕食 パン、牛乳

1月18日（水）

朝食 パン、牛乳

昼食 パン、牛乳、※おにぎり

夕食 パン、牛乳、※おにぎり

※後に鐘紡大阪本社の社員の方々が作って配送してくれた物とわかる。

まだ病院ということで物がある。とりあえず最低限の食事と飲料水、電気、暖房、寝場所とそろっている。テレビではついに死者が2400人を超え、依然として増えていつている。一体何人の死者を出せばよいのだろうか。恐らくとてつもない数になると思われる。

1月19日（木）

朝食 おにぎり、牛乳

昼食 岡山名物桃太郎の祭りずし、ほうじ茶

夕食 おにぎり、ピザパン、牛乳

久しぶりにごはんを食べたように感じた。震災から3日目というのに食事だけはきちっと確保しているのは、とてもありがたいことだと思う。

死者はついで3500人を超えました。

1月20日（金）

死者4048人/不明者727人

朝食 三好野本店弁当

昼食 三好野本店弁当

夕食 パン2個、牛乳

1月21日（土）

朝食 三好野本店弁当

昼食 パン2個、牛乳

夕食 三好野本店弁当

1月22日（日）

自宅に帰ったため分からない

1月23日（月）

震災後1週間

死者5063人/不明68人

朝食 パン2個、バナナ。

昼食 祭り寿司

夕食 三好野弁当

1月24日（火）

朝食 パン2個、みかん

昼食 駅弁祭り寿司

夕食 三好野弁当

母の救出

神田博文

午後3時半、倒壊した家屋から8時間後に救出された神田キヌエさん（78才）が運び込まれる。筋肉の挫傷や骨折を負われながらも、一命を取り止める。

「死んでいるのではないかと恐る恐る2階の畳をめくり、床板をはがして行きました。いつも鏡台の前で寝ているために鏡の破片が心配でしたが、布団によって母は押しつぶされた壁と和ダンスの衝撃から守られ、無事救出することができました」

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

投書箱「声」より

西市民病院からの紹介でお世話になることとなり、不安いっぱいでしたが、看護婦さん、受付、会計のみなさん、医師の方々とともに丁寧で、説明も十分すぎるほど、していただき涙が出る程で、不安がきえていきました。本当によい病院に来れたこと感謝しています。今後ともお世話になります。どうぞよろしくお願いします。

谷典子

先日、家の方に診断書を送って頂いたのですが診断書とは別に手書きで、地震のお見舞のお手紙が同封されていました。病院の方も対応で忙しい時だと思うのに、丁寧な心遣いにとても感激しました。書いて下さった方がわからないのでこの「声」を利用して...ありがとうございました。

診療...卓越した経験で全力を注入して頂きまして頭が下がりました。

婦長...豊かな経験を持ってソフトに対応して患者として非常に落ち着きました。

看護...テキパキと下の処置等訓練されている。皆様優しく全力をつくす姿に喜んでいます。

尚、今後共、弱者の為に、頑張ってください。

木下

“阪神大震災の中で生まれた小さな生命”

5階病棟 中野史子

右近裕子氏。31歳。1992年3月、3130g女児を経膣分娩している。職業は在宅で編集のデスクワーク。現在、京都市に在住しているが、昨年12月から里帰り分娩のため帰神し、今回の震災にあう。

1月20日、午後6時30分、右近さんが入院。立っていることさえ困難な様子。

分娩が切迫していると判断し、分娩室へ。

内診すると子宮口9cm開大、eft. 100%、SP+1と進行していた。出血等の異常所見はみられない。
即、血管確保と分娩監視装置によるモニタリングを開始する。元気な胎児心音が規則正しいリズムで分娩室に響く。

6：35 子宮口全開大。

6：40 排臨。

怒責時、右腕の疼痛を訴える。

地震の時タンスが倒れてきたため、変色している。

6：42 発露。

6：44 胎児娩出。

第3回施を助け、骨盤誘導線にむかってすみやかに娩出させる。

2965g女児（のちに華子と命名される）

臍帯を切断し、生まれたままの新生児を胸に抱いて“どんなことができるか
不安だった”とつぶやいて、涙を流された。

6：47 胎盤娩出。

陣痛開始午前4時から、わずか2時間47分のドラマであった。

支援物資を送って下さった方々



(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

”御礼”

この度の阪神大震災に際しましては皆様方より大変心のこもったお見舞を戴き有難うございました。

震災直後に戴いた水や食糧の有難さは口では言い表せません。陸の孤島となつてしまった兵庫の地に皆様方より数々のお見舞をいただき、人の心の暖かさがとても嬉しく、復興への活力となりました。人々にとって何が一番大切であるかという事をこの危機のなかで皆様方にお教え戴いたと思って居ります。

これからも神戸の医療機関の一つとして皆様方のお役に立つべく職員一同頑張っ参ります。
宜しく御指導下さる様御願ひ申し上げます。

お見舞を下された方々の一覧表

お見舞を下された方々の一覧表			医事課	飯沼	誠
支 援 者	連 絡 先 ・ 住 所	支 援 内 容			
金沢青果卸組合殿	兼六青果株式会社 取締役 野尻邦彦 金沢市西念町リー番地0726-65-6879	リンゴ4000、バナナ4000			
神戸中央青果卸売	幹事長岡真078-681-1424	同上			
協同組合青年会殿	神戸市兵庫区中之島1-1-1438番				
タバタ商事有限会社殿	代表取締役 田端重三 金沢市若宮第一区画40街区24番	同上			
松本勝也殿	日米クック 078-651-3053 神戸市兵庫区上庄通3-2-16	缶詰、水、スップ麺等 おにぎり248			
富士通テン殿	研究所・阿部氏 神戸市兵庫区御所通1-2-28	石鹸、みかん、生理用品			
三菱重工殿	福祉課長 神戸市兵庫区和田崎町1-1-1	弁当189			
U C C 殿	健保組合・金田氏078-361-8901 神戸市中央区港島中町7-7-7	水50ケース			
竹内一廣殿	株式会社三友06-338-6661	水、プロパン、お粥など			
本田技研・兵庫殿	藤沢省吾 078-579-3000 神戸市兵庫区塚本通8-1-8	紙おむつ15ケース			
株式会社P & G	製品開発本部岸上茂樹078-579-4318	紙おむつ20ケース			
明石工場殿	明石市二見町南二見6番地				
清水木材殿	代表取締役 清水格 078-651-1111 神戸市兵庫区今出在家町3-2-10	讃岐うどん800食			
カネボウ労働組合殿	中央執行委員 長浜基二 大阪府大阪市都島区友通町1-7-28	タオル・歯ブラシ等			
崇教真光殿	兵庫大道場（宮道氏）078-361-4813 神戸市中央区山本通5丁目8-111	紙おむつ・缶詰等			
ヤマイ醤油殿	代表取締役 西脇治國 兵庫県揖保郡揖保川町袋尻231の11	ミネラルウォーター×100L			
機ナックスナカムラ	大阪市北区天神橋2丁目5-25	おにぎり100ヶ			
大阪支店藤原殿	若杉グランドビル3F				
ウオクニ神戸支社殿	支店長 田林英一 神戸市灘区船寺通4丁目5-16	プロパンガス用コンロ他			
三洋電機クレジット	辻川係長 06-900-1281 大阪府守口市八雲東町2-82-22	電機ポット×5			
広島大学病院殿	庶務部長 小山五朗	衛生材料、医療品等			
桃井真殿	御本人				
かおり殿	東京都品川区東五反田2-21-11-438	チョコレート等菓子類			

支 援 者	連 絡 先 ・ 住 所	支 援 内 容
山 中 照 代 殿	神戸市東灘区魚崎北町4丁目8-17	女性用下着等
橋林神経クリニック殿	中田サチコ	おしぼり等
鏡 本 ヒ デ さ ん		
ご 家 族 殿	神戸市長田区大塚町2丁目1-14	オートミル、豚汁等
鶴 林 秀 子 さ ん		
ご 親 戚 殿	神戸市中央区吾妻通1丁目1-3-405	おにぎり120、ゆでたまご120他
白 羽 緑 殿		
	神戸市垂水区塩屋町6丁目21-17	紙おむつ
高 橋 よ し え 殿		
	神戸市北区鈴蘭台南町7丁目8-28	井戸水45L
伊 達 静 男 殿	カネボウ化成代表取締役社長	
	大阪市北区南森町14-19サウスホレストビル4F	みかん、ペットボトル等
宝 酒 造 殿	灘工場	水4トン
	神戸市東灘区青木町2丁目1-28	水10トン
朝 日 運 輸 殿	078-652-1201	
	神戸市兵庫区材木町1-11	水10トン
ダイエーグループ殿	ダイエー神戸本店	水20トン
	神戸市中央区港島中町4-1-1	水20トン
堀 井 薬 品 殿	第2営業部 平安絃治	
	大阪市中央区内淡路町1-2-6	見舞金
コ ニ カ	コニカ関西支社 06-252-5431	米、缶詰、水等
新 谷 殿	大阪市中央区西心斎橋1丁目5-5千代田生命館ビル10F	
市 会 議 員		
長 嶋 登 殿	神戸市兵庫区梅元町16-40	(水道局と交渉)
兵庫県看護協会殿	会長 山崎京子	下着類
	神戸市中央区楠町6-11-12	
竹 中 工 務 店 殿	内多氏	
	神戸市中央区栄町通1丁目2番7号	水
田 辺 鉄 雄 殿		たくわん、うめぼし
	長浜市神照町340	
嶋 原 耕 平 殿		見舞金
	奈良県橿原市曾我町915-48	
下 間 幸 雄 殿	医療法人愛仁会	見舞金
	大阪市北区兎我野町4-12ニューナショナルビル5F	
長 嶺 篤 子 殿	本人	紙おむつ、ウェットティッシュ等
	愛知県尾西市開明字馬保里	

支 援 者	連 絡 先 ・ 住 所	支 援 内 容
伊 藤 淳 二 殿		リング、お菓子等
	大阪市旭区大宮5-6-29	
日本生命相互保険会社殿	常務 森口昌司	軍手、タオル、セッケン等
	大阪市中央区今橋3-5-12	100セット
阪神大震災総合対策本部殿	本部人事総務室	食料、水、衣類、毛布、
	大阪市都島区友淵町1-5-90	布団、台車、プロパンガス等
神 戸 外 大 殿	富川氏	オムツ15ケース
	神戸市西区学園東町9-1	
区役所 衛生課殿	谷、中村、玉崎氏	水
	兵庫区新田町1-21-1	
兵庫県消防学校殿	中谷氏	自転車、下着、食料等
	神戸市北区ひよどり北町3-1	
神 戸 市 衛 生 局	福永氏	弁当600×9日間
健 康 増 進 課 殿		700×1 350×2
神 戸 市 衛 生 局	太田氏	水
地 域 医 療 課 殿		
岡 山 市 水 道 局 殿		水2トン車×4台
		ペットボトル多数
京 都 市 水 道 局 殿		1・19～27迄
		毎日病院前で給水
神 戸 市 衛 生 局 殿		ロックアイス200ケース
千代田テクノエース	代表取締役社長 佐藤 清	
株 式 会 社 殿	横浜市神奈川区新浦1丁目1番地25	見舞金
石 井 正 紀 殿	御本人	
	横浜市磯子区森3-17-33-409	見舞金
じゃがいもの会殿	森 進一03-3495-0808	チョコレート10C/S
	東京都品川区上大崎4-5-26-2-101	
鐘 紡 株 式 会 社		紳士用パジャマ100着
綿 絹 事 業 部 殿	大阪市北区梅田1-2-2	
三菱商事㈱大阪支店殿	電力システム部長 佐々木 篤	見舞金
	大阪市北区堂島浜1丁目1番5号	
小 林 製 薬	主任 菊岡勝司	酸素マスク等
小林メディカル事業部殿	大阪市中央区道修町4-7-6シオノギ道修町ビル1F	
カネボウ薬品株式会社		薬
神 戸 営 業 所 殿	神戸市中央区八幡4丁目1番3号	
鐘紡株式会社資材部殿	落合部長	ビール券20枚
	大阪市都島区友淵町1-5-90	

鐘紡本部よりの救援物資

1/17（火） 握り飯500個。パン500個。コーヒー270。オレンジジュース270。
カップ麺30ケース。ポリタンク5缶と水。

- 1/18（水） 握り飯800個。パン1000個。牛乳1035。コーヒー90。ポリタンク20缶と水。
- 1/19（木） 握り飯800個。パン1000個。牛乳630。いちごジュース405。
使い捨て食器6000。軍手17打。ポリタンク20缶。ポリバケツ30個。
手押し台車10台。ゴミ袋3300枚。ポット5個。茶葉。
紅茶2パック。角砂糖2パック。クリープ3本。
- 1/20（金） 握り飯1200個。パン1000個。牛乳1050。生理用品500箱。割り箸多数。
ショーツ300。使い捨て食器5700。サランラップ100個。ゴミ袋300枚。
アルミホイル100個。トイレットペーパー500巻。紙コップ2000。
ウェットティッシュ200個。ポリバケツ25個。天然水10本。
1リットルふた付ペットボトル300本。使い捨てカイロ50個。
- 1/21（土） パン1000個。柄杓20本。手押し台車5台。ポリバケツ15個。
ソックス250。ブリーフ300。ショーツ300。Tシャツ300。
- 1/22（日） パン1000個。緑茶（缶）42ケース。
- 1/23（月） パン500個。沢庵・梅干1箱。ソックス500。ストッキング3000。
- 1/24（火） パン500個。
- 1/25（水） パン300個。布団50組。
- 1/26（木） パン300個。布団30組。
- 1/27（金） パン300個。6畳用ゴザ9枚。
- 1/28（土） パン300個。
- 1/29（日） パン300個。
- 1/30（月） パン300個。

鐘紡本部の後方支援

副院長 松浦役兒

社内報「カネボウ」No. 592の4面に大震災特集が掲載されている。その中で石原社長は、「団結と献身的協力心より感謝」として当社関係者で震災で犠牲になられた方々への冥福を祈るとともに、初期救援における献身的協力の成果について触れ、さらに鐘紡記念病院への支援活動についても社内外の方々へ感謝を述べられた。病院に勤務する者にとって温かいご配慮に心より御礼申し上げます。

また特集によると、当時の本部の状況がドキュメンタリー風に述べられている。紙面では、17日（火）の午前9時、本部スタッフ出勤者は都島社宅居住者を中心に男子20名、女子も小数。まず社員の安否と工場・事業所の現状確認に追われる。森商社宅倒壊の情報が入る。安否不明。午前10時に石坂常務を長とする災害対策本部設置を決定。午後からは情報収集を続けながら、甲南寮を前線基地として森商社宅救援を指示。鐘紡記念病院と甲南寮へ緊急物資の輸送を開始とある。さらに「鐘紡記念病院を救え」の欄では、1月17日は、病院の状況と本部から緊急物資が到着した時の様子が述べられている。また伝え聞くとところによると、その朝から本部の女子従業員は4階の研究室食堂で「おにぎり」作りに専念し、30人で12時過ぎまで作ったそうだ。13時頃に小型トラックに積み込み、その他の物品と一緒に甲南寮と鐘紡記念病院の方へ向かった。第1便の救援物資である。病院に着いたのは23時半頃で、気賀事務長と飯沼係長が出迎えた。普通なら1時間位の所要時間が10時間半もかかり、渋滞の中をひたすら忍耐の運転であったことを思うと頭が下がる。「おにぎり」500個、パン500個、カップラーメン30ケース、飲料水の入った18リットルのポリタンク5個、缶コーヒー、オレンジジュースなどで、その日の病院にとって本当に有り難い支援物資であった。

さらに翌18日（水）の本部では、特集号によると午前9時、昨日はトラックが大渋滞に巻き込まれたため、バイク便を手配。研究所女子社員が中心となり、昨日に続き「おにぎり」作りを開始。食堂で30名が米120キロを使って、午後5時過ぎまで1850個作り、腰が痛くなるまで頑張ったそうだ。午後1時、先発隊としてチャーターしたバイク便3台が、20リットルの水の入ったポリ容器2個ずつと救急医薬品などを積んで出発。午後3時40分に無事病院に到着。午後4時には、バイク便第2便が本部を出発した。同時に水、「おにぎり」、医薬品を積み込んでワゴン車も本部を出発。午後5時30分にバイク便第2便が病院に到着した。ワゴン車が西宮で渋滞に巻き込まれたが、物資を運び戻ってきたバイク便に荷物の一部を移し先発させた。午後11時ワゴン車もやっと病院に到着した。当時の本部での、具体的な対応の様子が記載されている。またバイク便が機動性にとみ、交通渋滞を伴う災害時搬送には、トラック便より遥か有効であるという狙いでTBSテレビが搬送風景を撮影し、1月21日に放映された。この日本部から、「おにぎり」800食とパン1000個、牛乳1035個、缶コーヒー90個、ポリタンクの水20個に及ぶ貴重な支援を受けた。

19日（木）は、神戸市災害対策本部に依頼していた救援食の弁当300食が、昼過ぎに到着し、1日2回計600食が受けられるようになった。また前日より1トン車のタンクローリーで、近隣の被災者と共有の給水が受けられたので、気賀事務長は本部に「おにぎり」と飲料水の支援を辞退し、パン500個だけ供給して欲しい旨依頼した。既に手配済みであるとのことで、明日迄は「おにぎり」1000個とパン1000食、牛乳1000本を送るということになった。この日は、18リットルのポリタンクに水40個と食料を含む救援物資を1ボックスカーに積載して本部を出発した。NTTの協力で、大阪南港を16時に発、海上輸送で神戸港の摩耶埠頭に17時に着き、病院には19時頃到着した。

20日（金）から22日迄はパン1000食と牛乳1000本、その後1月31日迄パン500食の支援を本部から戴いた。食料補給に難渋する災害地にあって、有り難いことに病院では患者、職員の食事に事欠くことはなかった。また飲食物以外に生活必需品や衣類、寝具なども送って頂き、院内の避難者へも配布することが出来た。本部からの搬送便は交通渋滞のため早朝もしくは夜中に届けられ、関係者の長時間に及ぶ昼夜分たぬ努力の支援に感謝する。また、20日の夕方、本部資材部では、既に八方手を盡し依頼していた大型タンクローリーが、日本石油（株）の協力により、和歌山県でやっと1台チャーターされた。しかも1週間の雇車を契約して頂いた。

21日（土）に、そのタンクローリーが高槻第二工場の水10トン積み込み、15時に出発して24時に病院に着い

た。我々が首を長くして待ち望んでいた10トン車の到来である。丁度私が病院の表玄関に出た時であった。門柱灯だけが付いた薄暗い病院前の道路にタンクローリー車が横付けされた。車体には指示した通り「鐘紡記念病院災害対策用緊急医療用水」の垂れ幕が張っていた。運転手が窓越しに外を見て迷っている様子である。嬉しくなり早速駆け寄り、夜間受付に行き手続きするよう教えた。

22日からは、この10トン車が大活躍して、新港第一突堤に停泊中の自衛隊給水船との間を5往復のピストン運転してくれた。竹中工務店が契約したタンクローリー2台、さらに病院がTV放映で有名になりタンクローリーのボランティア申込なども加わって、本格的に受水搬送が始り、水道管から配水される1月27日まで運送による水補給が続けられた。病院における水の必要性については、1日1人約200リッターが消費されるといわれ、洗滌、消毒、汚物処理など清潔維持、その他給食や医療上の利用を含めると多量の水が必要である。われわれの病院でも通常1日200トン位が利用される。断水が解消すると病院機能が復活する。

23日（月）からは、神戸市内の他の病院に先駆けて日常診療や手術が可能となった。また厨房の機能も復活した。しかし都市ガスが供給されないので、熱源が問題である。レトルト食品のレンジ調理による簡便なLPGガスの利用の併用を試みることとなった。

1月22（日）午後、本部資材部にLPGボンベの調達をお願いした。山口県小野田市の富士商（株）に依頼し10kgボンベ30本確保して頂き、器具は同日21時に小野田市を出荷し、23日（月）の朝4時半に病院に配達された。即刻使用開始し、26日より患者特別食の調理等に本格的に利用し始めた。これらは本部の後方支援の賜物である。

本部における震災対応は、前述のように地震当日の1月17日午前中に決められた。まず石坂常務（人事総務室長）を長とする災害対策本部が設置され、情報収集と鐘紡記念病院を含む関連施設への救援物資の輸送を開始した。翌日18日には、繊維から化粧品、薬品、食品、不動産まで多角的に事業を行っている鐘紡では、各事業本部でも個別に対策本部が設けられていたので、全社的に総括するため総合対策本部と改め石坂常務が本部長として指揮された。さらに1月21日午後2時には、災害対策が長期化すること、全社的に復旧対策の早急な立案が必要なことから、総合対策本部長を三谷専務とした、震災対策本部組織の体制の再編が行われ、事務局は本部の人事、労務が当ることになった。事業内容としては、被災者の大阪地区受け入れとして、カネボウグループ全社の従業員で家屋が崩壊し居住不可能、かつ親類等移転先がない方々への居住施設への収容。交通遮断等による従業員の宿所確保。会社業務への応援体制として、被災事業所の業務回復のため阪神地区以外の各社からの人材派遣などの応援要請。被災者に対する義援金カンパなどである。

またこの21日には、災害対策本部長の石坂常務が救援物資の車両に同乗され来院された。病院の現状を視察し、17時に病院を出られたが、車の渋滞で都島の本部に着かれたのは夜中の午前2時であったそうだ。

22日の日曜日には、石原社長が朝の6時に、救援物資の車で都島の本部を出発され、8時半に病院に着かれた。上羽院長、気賀事務長より病院の現況をお聞きになり、院内を視察、厨房では本部からの支援食料の状況を聞かれ、受水槽へのタンクローリーの給水現場も見られた。私もお会いすることが出来た。

1月23日14時に、三谷総合対策本部長により、図1に示すような具体的目的が示され、25日付で人事総務室長回章が配布された。鐘紡記念病院については、特別項目で資材部が担当部門となり、今までの支援を継続して積極的援助を頂くことになった。

1月26日付で、落合資材部長は気賀事務長宛に「貴院支援対策の件（連絡）」として書類を送付した。本部および病院の窓口を資材部と気賀事務長とし、支援内容、連絡体制のあり方、報告記入要領などについてである。また同日、総合対策本部の定例会議出席メンバーに、鐘紡記念病院支援状況（第一報）の報告書を配布した。その内容は、1. 基本的な考え方；鐘紡記念病院の機能回復を図るため、支援活動を展開する。2. 任務；病院の機能維持上不可欠且つ優先順位の高い、水・燃料・食料・医薬品等の迅速的確な調達供給活動を遂行する。3. 供給実態として（1）給水は1月23日より、次の3系統にて供給中。1専用給水車（資材部手配の10tローリー車）神戸市浄水場と病院間をピストン輸送中、50～60T／日、2神戸市給水車：不定期且つ保証なし、現状平均50T、3市水道：送水試行中なるも水圧上昇せず。合計約100T。（2）燃料は、10kgボンベ30本調達、1月23日より使用開始。1月26日より本格使用開始。病院近郊にてガス充填可能箇所探索中。（3）食料は、病院独自にて充足体制が整備されつつあるが、パン300食分を1月30日まで継続輸送の計画。（4）医薬品等は、現況充足している旨の回答あり。今後、要請あれば対

応。(5) その他、1月18日より現在に至るまで、ゴミ袋・食器・台車等々全約30品目調達し、順次輸送。4. 支援体制の整備；情報系統の一元化と迅速且つ正確な情報交換が絶対条件。であり、鐘紡本部の積極的な支援体制が如実に知ることが出来る。

伊藤名誉会長からは、地震後すぐに病院の被災状況についてお問い合わせがあり、さらに、晴れがましく無いようにとのご配慮で来院された。しかもきびしい食料状況をお察しになり、新鮮な多量の果物のご支援を頂いた。

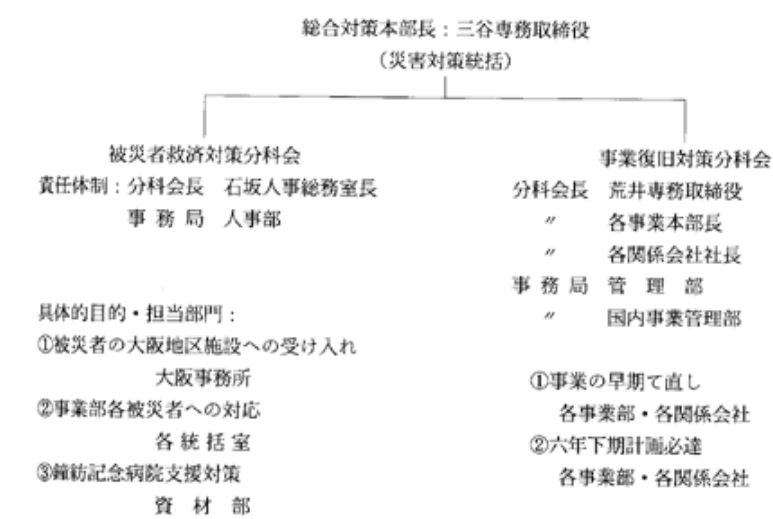
永田会長（病院理事長）が、地震直後、交通渋滞の中を長時間かけて、病院の被災状況について視察にいられた。院長、事務長から当時の対応や被害状況について聞かれ、院内職員へ災害医療への健闘に感謝の言葉をかけられた。

石澤名誉顧問（病院顧問）からも、地震直後に病院の状況のお問い合わせがあり、さらに断水で滅菌作業が出来ないと思われ、ディスポ器具の提供支援の話があった。後日業者の方より器具の提供をうけた。

その他、病院に関係ある方々から、色々とお見舞や救援物資を数多く受けることができた。人のご厚意や親切に接することができ、職員の全てが感謝の気持で一杯である。紙面を借りて衷心より厚く御礼申し上げる。

阪神大震災における鐘紡記念病院は、患者は勿論のこと、病院職員も含めて皆が被災者であり、まさに互いに励まし合いの医療活動の場であったと言っても過言ではない。「衣食足りて礼節を知る」と言われるが、ライフラインの途絶えた厳しい中で、院内の誰もが医療人として使命感を果たし得たのは、地域外からの心の籠もった強力な支援があったからに他ならない。殊に鐘紡本部からの後方支援に負うところが極めて大きかった。

図1 「阪神大震災」総合対策本部再編



被災者の声 ～我々も被災者であった～



震災をふり返って（身内を亡くして）

内科 徳宮俊信

震災は多くの生命と財産を奪い、心に深い傷跡を残した。須磨の実家は全壊し母と妹と姪の命が奪われ、東灘区に住む義弟の母親の命も奪われた。同時に4人の身内を失い、残された家族は呆然とし、深い悲しみと虚脱感におそわれた。しかし、いつまでも感傷にふけるわけにはいかなかった。残された家族の心の傷が広がらないように、しっかりとけじめを付けなければならなかった。阪神間に点在する家族が交通が麻痺している状況下で集まるのは容易ではなかった。また、それぞれが被災していた。

遺体収容所は重苦しい空気に包まれていた。そこには無表情な遺族に見守られて布団や毛布にくるまれた遺体が並べられていた。家族の遺体を探すのに時間がかかった。葬儀社に連絡すると、葬儀はできないと断られた。あまりにも特異な事態で、組合で話し合っ取り決めたとは分明していた。お寺さんも倒壊していた。花は、ろうそくは、線香は、火葬は、ドライアイスは、誰もが未知の体験で困惑し、混乱した。

小1時間で集まれるはずの場所に数時間かけて残された家族が集まった。これからどうする。東灘の母も一緒に葬儀をして欲しいと見るからに憔悴しきった義弟から申し出があった。誰も異論はなかった。葬儀社に遺体引き取りの相談を試みた。しかし、火葬の手伝いはするが交通麻痺のため東灘区へ遺体を引取りに行くことはできないと断られた。

すべてを自分達の手でやらなければならなかった。異常事態の中で形を整えていくために、綿密に計画を練らなければならなかった。小さい子供を抱え避難所に避難しているもの。病人を抱えているもの。受験生を抱えているもの。それぞれに事情があった。しかし、家庭の事情はだれも言わなかった。この世に生を受けた人間として、一番大切な仕事に取り掛かろうとしていることを知っていた。役割を分担した。一度別れ別れになると連絡が取れなくなるおそれがあった。火葬が時間的にまちまちになりそうだった。困惑した。お寺さんを探したが倒壊したり、避難所になっていたりしていた。一報がはいった。火葬は同時にしてもらえる。よかった。次はお寺さんだ。信仰の深い母の宗旨にこだわった。いろいろ考えられるつてを使い探した。見つかった。安堵感が込み上げてくる。1月22日、無事に密葬を終えた。残された家族の間に努めを果たした実感があった。

私の家も壊れた

7階病棟 角田祐子

地震がおこったあの日、私と家族が家を飛び出してみると、辺りにはガスの臭いがたち込め少し離れた所で火事が起こっているのが分かり、爆発して死ぬのではないかと思った。明るくなってくると自分の家が傾いてしまっているのが見えた。病院が気になったが、家族と離れたら二度と会えなくなる気がしてどうしても行けなかった。今頃私のかわりに誰かが忙しい思いをしているのだと申し訳なかった。翌日、通勤路の菅原市場の辺りが焼け野原になっており、また怖くなった。地震当日の病院の片付けはとても大変だったことを聞いて、また、申し訳なく思った。私は地震直後、看護婦としての使命感より、家族の一員であることを選んでしまっていたのだと今は反省している。

その後勤務に復帰したが、親類の家や避難所からしばらく通った。断水が続き、いつもは患者の保清に当てている時間を、バケツでの水運びやトイレの汚物処理などの雑用に費やした。力仕事で疲れても、避難所では、自分たちの今後の住まいについて考えてしまい、休まる暇がなかった。病棟でも家の壊れてしまった患者がおり、落ち込んでいたので、「私の家も壊れたよ。みんな同じなんだから、頑張って。」と励ましてまわったが、自分まで暗くなってしまいそうなのをなんとかこらえている状態だった。地震後は、以前から入院していた患者も自分のことしか考えられなくなってしまって、家が壊れたので退院しない、余震が来たら家に一人では不安なので退院したくない、という人が増えている。そして避難所で心身ともに疲労した人を受け入れられるベッドがない、という状態に陥り、この災害時に、病院が本当の意味で役立てなくなっているのではないかと思う。皆不安なのは私も家をなくしたので少しはわかる。避難所で少し生活して、カゼがはやり寝込んでしまう人々を見て来たので、そういう人々を少しの間でも病院のベッドで休ませてあげたいと私はずっと考えている。被災地の中心で機能している数少ない病院の役割なのではないかと思っている。

被災地での私

7階病棟 中條和子

今でもあの地震が夢であってくれたら...と思ってなりません。家が全焼して、大切にしていた物や、可愛がっていた動物を失いました。「被害者としての話を中心に」と原稿の依頼がきて、いざ書こうとしても色々な事が思い出されて涙が出て書けませんでした。

母と二人でやっとの思いで壊れた家から抜け出しましたが、母はショックが大きく、冷静を取り戻すのに時間がかかりました。母の前では出来るだけ悲しい顔を見せまい様にと気が張っていましたが、夜になると孤独感が強くなって布団のなかでは泣いてしまう日もありました。あれから、ようやく一カ月が経ち、一つ一つの出来事が思い返せる事が出来る様になったので書き始めようと思います。

当日、準夜勤から帰ってきて熟睡していたので、大きな揺れも何かが何だか分かりませんでした。次第に頭が上から砂が落ちてきて家がすごいことになっていると気がつきました。母が無事だと分かり一緒に布団の中にもぐり、おさまるまで抱き合っていました。周囲は真っ暗で、家の形はなく、体がやっと通れるくらいの隙間から無事に脱出しました。周囲の家も半壊、全壊の家ばかりで、余震の度に崩れる家の音が非常に怖かったです。生き埋めの人も多く、やっと救出した人はチアノーゼになっており、救急隊の人と一緒に心臓マッサージや人工呼吸をしても蘇生できず、目の前で亡くなっていく人の姿に、自分の無力さと悲しみで涙が止まりませんでした。

近くに住んでいる家族が無事とわかり安心したのか、急に病院のことが心配になり見に行ったら、みんなも無事だとわかりほっとしました。後先のことも考えず「明日、日勤ですから必ずきます」と言ったものの、家に帰ったらすでに全焼、電気、水道、ガス、食糧もない生活、今日寝るところさえわからない状態から地震一日目の夜を迎えたのです。当然のことで、次の日からは休みをもらい、私と妹は救援物資をもらうために走り回りました。給水車から水をもらうまで三時間かかります。ガスボンベを使い、少量の米でお粥を作り、一人一杯づつと梅干し一個が夕食です。贅沢はできないからと、たったそれだけのものでもなかなかのどに通りませんでした。夜中も大きな余震が続き、あの時の恐怖がまた来るのではないかとなかなか眠れません。しかし、電気がつかないため、太陽が出ている間に救援物資と水を集めに行かなくてはならず、日がしずめば、ローソク一本で過ごす毎日でした。電気がなければ、明るさや暖かさはなく、みんな神経がピリピリ張り詰めていて、やっと六日目に電気が灯った時はうれしくて電気という電気をつけて喜びました。電話は四～五日して通じ、心配して電話をかけてくれる人も多くなり、物資をわざわざ運んで来てくれたり、とてもありがたかったと思います。何よりもたくさんの人の顔が見れるだけうれしく、安心しました。

他の県から救援にかけつけてくれた大勢の人々のあたたかい言葉や励ましを貰ったり、友人や知人から支えてもらい、人の暖かさを感じました。私は、この地震で失ったものは沢山あるけれど、大切なものは物やお金ではなく「人」であるということを実感しました。それは何物にも変えられない、大きな財産であると思います。そして、命の尊さと。救われた命を大切に、自分のために、又看護婦としてあらゆる場で役立てる様に努力していこうと思っています。

今は病院の上司のはからいで母と二人穏やかな生活を送らせていただいています。どん底に落ちたけれど、一日一日の実りが幸せにつながっていったからと笑顔でいる様にしています。そして、この大きな経験をこれからの生活にプラスにして頑張っていきます。

苦労した部屋からの脱出

内科外来 大崎総子

平成7年1月17日午前5時46分。その時私は、まだ夢の中にいた。突然、体が重くなり、訳もわからず悲鳴をあげていた。不思議なことに私の体に落ちてきたのは食器棚だとわかった。一人暮らしで食器類は少ないといえども、かなり重く抜け出すのに苦労した。抜け出られたもののそこから部屋を出るのがまた至難の技で電気もつけられず、今思うとあの状態でよくあの部屋から出られたなと改めて背筋が寒くなる。しかし、私の回りは、被害も少なかったため、膨大な被害に驚いている。

自分が生きている間に、こんな恐ろしい目にあうのは、これが最後になればいいのと思う。

何もかも一変したあの日

臨床検査部 畑中富久子

家族の者が家具の下敷きになりはしたものの、皆何とか這い出し、無事であった。近隣同志もまたお互いの安否を確かめ合いながら、皆家の外で、空が明るくなるのを待った。これ程の惨事であろうとは、この時、まだ気付かず。

空が明るくなってからも、何度となく続く揺れに怯え、家の中に踏み入ったのは、大分時間が経った頃。...愕然とした。ガラスというガラスは割れ、家具という家具はひっくり返り、床には物が散乱し、壁は壊れて、隣家や外が覗き見える有様。とにかく、貴重品を持ち出そうと懐中電灯を照らしながら、開かなくなった仕切り戸を蹴破り、ひっくり返った家具の下から必死に引っ張り出した。この間、揺れる度に外に飛び出すこと、数回。

ショックでか、まともに話せなくなり放心状態の父にも構えず、日中は、水や食料の確保に走り、夜は避難先の小学校でと、その後を過ごした。

倒壊したビルや家々、行き来する救急車や消防車の始終絶える事のないサイレンの音、コンビニに殺到した人達の行列、停電、電話の不通、断水、何もかも一変してしまった事態や光景と恐怖を、きっと忘れる事ができない。

生活や街並みが、一日も早く元に戻る様、祈る毎日です。

悲惨な我が家

臨床検査部 水口知加子

ドーンという音で目が覚めた。と同時に、激しい揺れが続いた。何が起こったのかわけが分からなかった。揺れがおさまるまで布団の中でじっとしていようと思っていたが、母親が名前を呼ぶのが聞こえたので、手探りで外に出た。すぐに近くの商店街で火の手が上がっているのが見えた。とりあえず、近所の人に声をかけて安否を確かめ合ったが、その先何をするべきか分からず、みんなオロオロしていた。しばらくして辺りが明るくなってきたので家の中に入ってみた。タンスや棚が倒れ、ガラスが割れて飛び散り、悲惨な状態だったが、ラジオをつけてもっと驚いた。現実には起こった事とは思えなかった。

たった十五秒で街に壊滅的な打撃を与えた今回の地震で、自然の力の恐さを実感した。

恐ろしかったあの日

事務課 千川紀子

いつもはまだ真夜中の夢ですが、今日（2月15日）は、早い目覚めでした。あれから、もう一カ月近くを迎えようとしています。この頃になって大分落ち着いてきました。今は、寮生活にも少しは慣れ、昨夜は夕食の買物に出かけた帰り道、夜空の星の明るさ、月の優しい丸さを眺めていると、1月17日の地震が嘘のように思えます。当日は、もう既に起きて食事の準備に掛り、妹は、ガスの元栓を何のためらいもなく、捻った所でした。時間は5時40分過ぎです。妹は、直ぐにガスの元栓を閉めたお陰で、ガス爆発の惨事を招かず、良かったと思います。その日の8時過ぎ、家が傾き、開けにくくなった玄関のガラス戸を、ようやく力を込めて開き、外に出て驚いた事に、一面道路は、粉々になった瓦が、あちら、こちらに散乱し、足の踏み場もありませんでした。まずは、近所の方と一緒に瓦の片付けを始めましたが、あまりの惨事に、手もつけられませんでした。その後は、部屋に飛び散った家具、箱、洋服等を片付けようと気持ちはあったのですが...、2人共、部屋の片隅に寄り添って座りました。もう何をする気力もなく、病院、友人、知人へと、電話を思いつき、受話器を取り上げました。が...、電話が通じませんでした。

何か元気をつけなければと思い、リンゴを食べました。やっと一息つきかけた時に、管理人から、裏の石垣が全て崩壊し、道路面に飛び散り、土台がなくなり、建物が宙づり状態であると知らされ、びっくりしました。それから後は、テレビのニュースで地震の大きさに驚き、取敢えず、山の手小学校へ、避難いたしました。教室はただ蛍光灯の明るさだけでした。一人二人と増え、3時頃には、教室は早くも60名近くの避難者で一杯になりました。平成とは、『内平らに外なる』『地平かに天成る』と聞きましたが、天変地異そのものです。この寒さ激しいなか、皆、常に冷静さを保ち、お互いに助け合い、励まし合い、早く日常生活の暮らしを取り戻したいと願いながらも、水、ガスも、無い生活には耐え難いものを感じます。積年を取り戻すには、未だ、多くの時間がかかりそうです。親しい友人の声を聞いたときは、涙声になる自分に、ハッと、我を忘れていた気がし、今になり、考えて見れば恥ずかしい思いです。

改めて、友人、知人よりの心温かい、言葉に励まされ感謝の気持ちで一杯です。

一日も早く元の勤務、元の生活に戻るよう努力致します。

地震による当院の影響



(イ)当院の人的被害

人事課 大川善久

(1) 家族（親族）の計報

氏 名	同・非同	計 報 内 容	発生場所
徳 宮 俊 信	非同	母、妹、妹の子供	須 磨 区
竹 内 理 枝	非同	弟	東 灘 区
稲 鷲 久 子	非同	祖母	長 田 区
浜 田 千賀子	非同	父	中 央 区
松 田 三 樹	同	母	灘 区

(2) 家屋の被害

		世 帯 主	非 世 主	独 身	寮 生	合 計
全 壊 (焼失含む)	自 家	1	5		(実家) 1	1 9
	借 家	2	3	3	4	
半 壊	自 家	4	1 8	1	3	4 1
	借 家	7	4	3	1	
合 計		1 4	3 0	7	9	6 0

(口)当院の物的被害

事務課 古川常男

(百万円)

区 分	項 目	金 額
建 物 設 備 等 の 被 害	女子寄宿舎ひび割れ等の修理	118
	病院建物ひび割れ、ガラス等の修理	10
	受水槽、空調機等の修理	5
	医療機器の修理	1
	コンピューター機器等の更新	6
	計	140
営 業 被 害	外来患者数の減少	115
	人間ドック受検者の減少	23
	断水による手術数の減少	8
	計	146
そ の 他	救急対応並復旧作業による労務費等	9
	計	9
	合 計	295

(八)患者数の推移

医事課 板谷邦雄

月 日	一 般 外 来	救 急 外 来	入 院	在 院
1月10日	799	9	11	213
11日	647	1	2	209
12日	542	3	12	213
13日	693	4	12	217
14日	326	2	2	212
15日	—	10	2	203
16日	—	9	2	204
17日		200	26	229
18日		200	8	230
19日	348	150	9	228
20日	432	170	10	229
21日	—	150	3	224
22日	—	80	8	222
23日	612	100	14	231
24日	547	80	6	227
25日	448	100	11	223
26日	443	100	8	224
27日	438	80	8	224
28日	232	30	7	226
29日	—	50	6	223
30日	501	50	9	229
31日	447	50	5	228
2月1日	349	8	10	228
2日	369	6	9	230
3日	564	4	7	231
4日	—	21	1	230
5日	—	17	1	222
6日	620	9	11	231
7日	576	3	5	229
8日	430	1	5	225
9日	369	12	10	228

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

(二) 患者圏、患者数の変動

医事課 板谷邦雄

「震災直後2ヶ月の状況」（以下、外来患者に休日夜間の患者は含まず）
当院は、患者圏の主体を地元の兵庫、長田、須磨の各区の湾岸地域（国道2号線以南）に置くが、これらの地域は、インナー地域として高齢者層の比重が高いエリアである。大震災の中心からはややそれたものの大きな被害を受けた区域である。
外来基礎患者数（約5500名）は、震災後2ヶ月間で過去半期実績と比べ大幅（約15%）に減少した。
外来基礎患者の主要増減要因は以下の通り

増減要因

- 1. 被災、ライフライン切断により学童、老人を中心に住民の絶対数が減少した。
（市区外への転出、避難）
- 2. 避難所の医療チームへの依存が進んだ。
（避難所では、医療ボランティアチームによる無料診療体制がとられた。）
- 3. 人間ドック客数が激減し新規患者の発生がストップした。
- 4. JR、各私鉄、市営交通等の交通機関の分断継続、国道2号線、43号線、阪神高速道路等の主要道路の通行禁止及びマヒ状態継続による他医療機関へのシフトが進んだ。（一方、市内他病院からのシフトもあり）
- 5. かかりつけの病院、診療所が被災した為に、当院の新患が増加。
- 6. 被災による負傷、避難所に於けるインフルエンザ流行、肺炎等による患者増。

[3月度の状況]

震災2ヶ月経過し、（3月中旬）、ライフラインがほぼ平常化した。避難所からの帰還も進み外来基礎患者数もほぼ昨年水準に戻った感がある。
但し、患者圏の観点からみると、兵庫区では昨年比全面的に増加した為に、市内患者数は増加したが市外の患者数は3割近く減少した。今後これを如何に増加させるか課題と言える。入院基礎患者数をみると、兵庫区に加え長田区が増加しているのが特筆される。西市民を含め長田区の病院が大きな被害を受けたことと関係していると思われる。

地域別基礎患者の比較

	6 年 3 月			7 年 3 月		
	外 来	入 院	計	外 来	入 院	計
兵 庫 区	2,696	210	2,906	2,852	247	3,099
長 田 区	580	51	631	565	61	626
須 磨 区	370	31	401	382	28	410
上記以外の神戸市	928	82	1,010	900	69	969
神戸市以外	615	45	660	453	28	481
合 計	5,189	419	5,608	5,152	433	5,585